

國學院大學学術情報リポジトリ

〔学生懸賞論文：
佳作論文〕 「肉付き面」モチーフの多義性：
「心の鬼」から鬼となる者

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西座, 理恵, Nishiza, Rie メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000585

「肉付き面」モチーフの多義性

— 「心の鬼」から鬼となる者 —

西座理恵

はじめに

「肉付き面」モチーフとは伝説、昔話、文芸作品で用いられる趣向の一つで、顔に付けた面が離れなくなり葛藤するという内容である。用いられ方と意味合いは作品によって様々であり、伝説では顔に付けた面が外れなくなった人が鬼や異形の者となる。蓮如伝説および昔話「肉付き面」では悪事に面を使用した老女の顔から面が外れなくなるが、高僧や信心深い他者の念仏などの力で外される。お伽草子『磯崎』では正妻が嫉妬心から

面で後妻を脅かすと顔から面が外れなくなり禪の力で外される。これらの「肉付き面」モチーフは、作品を中心に論じられている。美濃部重克「室町物語の挿絵小考」^{〔1〕}では、『磯崎』を特徴づけるのは「肉付き面」モチーフであり、このモチーフは姑の嫁いじめの昔話として流布しており、北陸の浄土真宗地帯では吉崎御坊における嫁おどしの伝説として知られていると述べる。そして赤木本『伊吹山酒典童子』の中で比叡山の児学生であった酒吞童子が風流踊りで被った鬼の面が離れなくなつて鬼に変身していくといった例も挙げている。沢井耐三は「お伽草子『磯崎』考」^{〔2〕}で『磯崎』の「肉付き面」のモチーフは「私

聚百因縁集』三・六話や『三國伝記』十一・二十五話には、賓頭盧尊者の靈験として、慳貪な女の顔に持っていた鉢がくっ付いて離れなくなる話が載っているが、そういった仏教説話が妬婦譚に作りかえられたもの」と推測している。

芸能研究の立場から徳江元正は、「児学生之母と大野木殿の子」⁽³⁾の中で「磯崎」と『伊吹山酒典童子』を取り上げて「双方とも、児が出てくる。立場こそ違うものの、これらの仏教説話や芸能の伝承や管理に携わっていた人々を推測してみる手がかかりとはなろう」と述べて、『伊吹山酒典童子』に関しては「やすらい祭りのごとき鬼形による芸能が先行しているのである」と論じている。藤井貞和も「いそざき」⁽⁴⁾において千葉県匝瑺郡光町虫生の広済寺で行われる鬼来迎に仮面地獄劇があり、その面に「肉附き面」伝説があると述べて、『磯崎』は仏教の説教によって広げられた話であろうが演劇的要素もみられると述べている。

南方熊楠は「磯崎」に就て⁽⁵⁾で同じ虫生の広済寺の伝説に触れ、他にも蓮如伝説や近世期の俳諧、昔話「孝行坂」、文芸では『七人比丘尼』、西沢一風「女大名丹前能」など、面に関係する作品の数々を紹介し、嫁姑の話には仏典「雜宝藏經」などの影響を考えている。柳田国男は「妹の力」⁽⁶⁾において、「肉

附き面」モチーフの福井県の伝説「よめ塚・よめヶ淵」、『小谷口碑集』の「おかる」の伝説、江ノ島の神社の鬼の面の話などを挙げて、信仰の面から考察を展開している。近世文学の研究者である延広真治は「江戸文学の多様性——肉附きの面」を通して見る⁽⁷⁾の中で「肉附き面」モチーフを含む文芸、伝説、説話、狂歌など様々なジャンルの話を収集し、通史的に紹介しておりデータベースとして大変有意義である。

以上の「肉附き面」モチーフをとりあげた先行研究において、美濃部や沢井、南方は作品や話の受容といった観点から取り上げ、徳江や藤井は芸能という側面から論じている。柳田は信仰との関わりを問題にし、一方、延広は多様な展開をみせる「肉附き面」モチーフの資料を総合的な見地から整理し、提示している。

文芸における「肉附き面」モチーフの話では、悪事をはたらく者の顔から面が離れなくなり、悪行を悔やみ反省して、仏教の力で面を外されるという展開が多くみられる。お伽草子『磯崎』はその代表的な作品であり、説教らしい倫理観に基づいて顔に付いた面が外れるまでの展開は順当である。一方、新潟および関東以北の「酒吞童子」伝説や、お伽草子『伊吹山酒典童子』のように、悪行なしに面が外れなくなって鬼になる話も散

見される。「肉附き面」モチーフを悪行に対する罰と考えると、『伊吹山酒典童子』の鬼のように悪行と関係のない者が仮面不離となって鬼になるのは、通常の倫理から外れた展開ということになる。この点において『伊吹山酒典童子』は通常と異なる主旨の作品といえる。

この二例以外にも、延広真治は、「肉附き面」モチーフを含む話として浮世草子、浄瑠璃・歌舞伎の脚本、合巻、読本、狂歌などを挙げ、また「肉附き面」モチーフの話ではないが、「嫉妬により鬼女になる」例として、『閑居友』巻下の三「うらみふかき女いきながら鬼となる事」（以下文中では、『閑居友』巻下の三と記す）、仮名草子『七人比丘尼』、お伽草子「かなわ」を紹介している。

これらの作品は嫉妬という「心の鬼」によって人が鬼に変貌するもので、『磯崎』もその系譜の延長上にある。歌舞伎・浄瑠璃などの芸能で面が付いて離れない演技は人目を引く演出になるが、一方、話の世界における「肉附き面」モチーフは「心の鬼」を可視化する装置といえる。「肉附き面」モチーフを受け入れる側には、人が鬼になるイメージが喚起され「肉附き面」の先には「心の鬼」を経て本当の鬼になる人の姿がある。しかし中には、延広が例として提示する狂歌『狂歌むめ柳』十一「姑

の開帳肉付きの面のやう 士芳」のように、女性の老醜を揶揄する表現も見受けられる。

ところで延広は先行研究において国際昔話話型カタログの分類による話型では、「肉附き面」モチーフに対応するのが「狡猾な牧師」(AT831)と⁽⁸⁾いう話型であると述べている。『日本昔話大成』八巻の「肉付き面」の「注」では「貧乏な男が金を発見する。貪欲な牧師が羊の皮をかぶって悪魔を装い、その男を脅して金を取るうとする。ところが家に帰ってもその皮がとれない。」と記される。延広の先行研究によると、欧米では広く分布しており、中国でも虎の皮をかぶって人を脅して、物を得ていた僧が虎になる類話（『太平広記』四三三巻「僧虎」）があるが、韓国では「肉附き面」の話型に対応するのは昔話「姑の毒殺」のような嫁と姑の葛藤譚であり、「肉附き面」モチーフをとりいれた話ではないと指摘している。

日本における「狡猾な牧師」の類話には、『諸国百物語』「丹波の国さいき村に、生きながら鬼になりし人の事」が挙げられる。漆を発見して大分限者となった者をうらやむ大悪性の隣人が、漆がとれる川の中で馬面をかぶり、赤熊を着て待ち伏せしたところ、面が外れなくなって死ぬ。しかし、男性の顔から面がとれなくなる「肉附き面」モチーフの話は文芸作品において

はほとんどみられず、延広が挙げる「肉附き面」モチーフの多くの例話でも、顔から面が離れなくなるのは女性である。

爐邊叢書『小谷口碑集』の「尾花踊りと七当の面と」^⑩という伝説では、「おかる」という嫁が姑を面で脅して顔から離れなくなる。おかるが付けた面は長野県白馬村の切久保諏訪神社の七道祭で使用される面であり、その祭礼では神社の氏子の方々が面を付けて面神の役割を担うが、女性は面を付けない。拙稿「長野県白馬村切久保諏訪神社の「七道の面」の伝説―三種類の伝説集を比較して―」^⑪では、『小谷四力庄傳説集』『小谷口碑集』『北安曇郡郷土誌稿』の三種類の伝説集において、山に住む姥神が女性の登山を嫌悪する、祭礼で使う獅子の面が女性の接近を忌むなど、女性の禁忌と関わる伝説があることを示した。『小谷口碑集』に、切久保の宮の「太郎子様」という女神の伝説がある。女性が祭礼において面を付けないのは、女神である「太郎子様」の伝承と関係し、おかるの顔から面が離れなくなるという話には女性が面を付けることへの禁忌の意味合いも含まれるのではないかと考えた。

以上の研究を踏まえて、本稿では、「肉附き面」モチーフの話が女性と結びつく基底にあるものを、十二山の神に関わる伝承を参考にしながら、祭祀および芸能における女性の禁忌とい

う観点から考察する。またお伽草子『伊吹山酒典童子』における「肉附き面」モチーフの意味合いと、「肉附き面」モチーフの伝説にみられる特徴との差異について考察する。

一 「肉附き面」モチーフと十二社信仰

(1) 山の神と女性

先行研究に挙げた柳田國男「妹の力」の「よめ塚・よめヶ淵」の中で、柳田は「肉附き面」モチーフについて、『小谷口碑集』の「おかる」という女性が面を被り姑を脅して、顔から離れなくなり、隠れた穴が十二という小祠である記述に着目している。他にも「十二」については、『史料としての伝説』の「おたま杓子」^⑫で、『黄表紙百種』「浮世操九面十面」^⑬を例に挙げ、十二神楽で女性が杓子をもつて舞うことから「十二」が山の神を指すと同時に、女性が「山の神」とよばれることになったと説いた。

十二神楽と女性に関して柳田は、多くの神社仏閣において祭典、法会の晴の儀式に杓子が用いられ、それを法師、修験からもちうることから、「杓子」には呪力が備わっており、杓子を持つことが女房を山の神とよぶことに通じるのだと説く。

柳田は「水の神の婚姻」⁽¹⁵⁾において、田植は田の神の誕生であり、そのために日の神と水の神との和合が必要であったと述べる。女性が水の神として「ヨメ」の装いをして清き水の辺から出現するというイメージから、普通の少女が水の神に扮するたに通常は化粧をするが、仮面もまた同じ趣旨として使用されたという。そして「肉付きの面とは神かわれかの境が恍惚として判別し得なかったことを意味するかと思う」と述べている。

しかし、拙稿「肉付き面」モチーフの変容⁽¹⁶⁾では、柳田が例に挙げる「肉付き面」モチーフの話が女性の神聖さを示す内容ではないことを指摘した。柳田は面を用いる女性に対して神聖なイメージを抱いており、「ヨメ」という語も好女・倩女という意味合いを持つと解釈している。女性を「山の神」とよぶのも、杓子の呪力につながることで肯定的に捉えている。

一方、金田一京助は「山の神考」⁽¹⁷⁾の中で、実家の盛岡に万歳が来て行く「春田打ち」という芸能について次のように紹介する。

春田打の舞には、太夫は若い美女の面を被って、種を下ろし、田をかえし、苗を植え、草を取る、最後に稲刈り、穂運びまでの所作を、静かに能がかりに舞って、いよいよ舞の手の済む瞬間、その美しいお面がさつと下りて、どこに忍ばし

ていたかわからない真黒な大きな醜いお面に早変わりして終わる。

そして、その「真黒な大きな醜いお面」は山の神の面であり、「山の神様は、ひじょうに嫉妬深い、気嫌のむつかしい、器量の悪い女」という印象があつて、尊称ではなく陰で呼ぶ語であると述べている。

また堀田吉雄も「山の神の禁忌」⁽¹⁸⁾の中で、柳田が「水の神の婚姻」のようにヨメという語を神聖視することに疑問を投げかけ、「筆者は嫁なども最初人嫁してきた当初は気心がわからぬので、忌むべき者ということで、ヨメと呼ばれたのであらうと思っている。好女と解するには当たらない」と述べている。金田一、堀田は女性を「山の神」とよぶことが、女性を神聖視することに結びつくとは考えていない。

柳田が十二神楽との関わりで言及する黄表紙「浮世操九面十面」は実際の芸能の演技というより、商家の主、妻、番頭などの登場人物の役割を神楽の面に例えて表現したもので、客齋で口やかましい妻が奉公人を杓子片手に叱りつける場面を「山の神は杓子を持って騒ぐ」と表現する。この例を挙げて、女性と杓子の呪力に言及する柳田の指摘には無理がある。

堀田は「山神祭の芸能」⁽¹⁹⁾で山の神の芸能に関して、菅江真澄『津軽のつと』⁽²⁰⁾の事例を、「陸奥東津軽郡平内村小湊の正月二十日のところに、村の女どもが酒を飲み、男装して手に手に杓子を持ち、笛と太鼓の囃しに合せて杓子舞を舞う」と挙げている。これは巫女舞ではなく、女性が男装して杓子を持つという勇壮な舞である。また「山の神の芸能は、管見に入ったものは頗る僅少で、未知のものが多かろうと思われる。従って、兎や角云々することは出来ないけれども、以上紹介したものは男舞ばかりで、女舞が少い」⁽²¹⁾と指摘する。

堀田は山の神はみな女神であるのに、山の神の芸能に女舞が少ないことに疑問を投げかける。また杓子を振り回すから女房を山の神と呼ぶのではなく、山の神には産育神としての神格が備わっており、女性が子供の産育者だからであると述べている。山の神が女性であるという伝承は全国的に多いが、女性を「山の神」とよぶことには怖く恐ろしいという意味合いが含まれ、したがって女性によって捧げられる山の神への芸能も少ないという。

新潟県弥彦神社の妃神を祀る大大神楽、面形の行道である白馬村切久保諏訪神社の七道祭でも、男性しか面を被っていないかった。その理由を女性と面との関係から考えると、神の女性

性、男性性という問題がみえてくる。

(2) 女性と祭礼および面

女性が従事する山の神の舞はなぜ少ないのであろうか。そのことを十二社信仰から考えていきたい。始めにその研究史を振り返り、女性と十二社の関係を確認しておきたい。堀田吉雄「産育神としての山の神」⁽²²⁾、および菊池章太「十二山ノ神の信仰と祖霊観(上)」⁽²³⁾では、山の神が十二社とよばれる理由について、山の神が女性であり十二人の子供を産むという言い伝えを挙げている。岩手県九戸郡山形村の伝承では山ノ神は「女性で一年に十二人の子をお産みなさる」⁽²⁴⁾、下北半島のイタコの祭文では「十二人のおん子に名をつけ玉へや山の神、子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥と名づけ玉ふ」と誦まれる⁽²⁵⁾。また、『山の神信仰の研究』の著者である堀田は「上越信の三国にまたがり十二様とか、十二山の神とか言われる神があつて、山の神の一種と考えられている。山の神は気が荒くてたたりやすい神であるが、十二とって祀ればどんな時にも山の神の祟りはないとも言われ」⁽²⁶⁾と述べている。

菊池は前掲論文の中で、山の神の信仰を最初に研究対象として取り上げたのは柳田國男の『後狩詞記』であり、その中で柳

田は山の民の信仰から里の民の信仰へと考察の範囲を広げ、産育をつかさどる神としての側面を明らかにしたと指摘する。次に、柳田の山の神の研究を継承したのは堀田吉雄であり、『山の神信仰の研究』では、山の神信仰の諸相と「山の神霊と祖先の霊とが融合している点」が明らかにされたと述べている。

一章の（1）「山の神と女性」では、山の神の研究史から女性性が山の神の芸能に関わる例が少ないことに言及したが、菊池は前掲論文において新潟県山古志村山古志地区の虫亀で採集された「山ノ神は器量の悪い女の神さまであり、女が来ると嫉妬するから男だけで祀る」という伝承を挙げて、山の神が女性の接近を嫌う理由を次のように述べている。

山ノ神が女性であるという伝承は全国の山村にあまねく見られる。しかもたいていは醜女とされる。女性の神であるならば、異性の奉仕を喜ぶのは無理からぬこと。男性の入山のみを許して女性を遠ざけたために、ねたみ深い女にちがいないと考えられたのは当然かもしれない。山に出かける途中で女性に会うと獲物がとれないとか、炭小屋に女性が来ると火が消えるという話はいろいろな場所で聞くことができる。山ノ神の祭りに女性は加われないという土地はたいへん多く、

山古志では今もそれが守られている⁽²⁷⁾。

また、加えて菊池は宗教史学の観点から、山岳霊場と呼ばれる場所はおしなべて女人禁制であり、そこは死者の霊魂がやすらう場所であるから、精進潔斎して登らなければ祟りがあると恐れられ、潔斎にあたつては女人を遠ざける必要があつたと述べている。

堀田も「山の神の禁忌」の中で、女性は山の神祭りに捧げる供物を食べない、祭祀に供えるものを作らない、祭祀には参加しないことを挙げて、山の女神が同性を排斥しようとする傾向があると指摘する。堀田は『山の神信仰の研究』の中で、林魁一「美濃國に於ける山の「こ」祭」⁽²⁸⁾の事例を頻繁に用いている。

この中で林は、美濃の山間部の「山のこ」という山の講では、男児や青年が山の神を祭る習慣があり、「一般には山の神を女神と信じて」と述べている。その山の講において、山の神は女性であり、女性はお供え物を作らず、祭りに参加しないと明確にされている事例を表に示した。このような事例を通して堀田は「産育神としての山の神」の章で、「この十二山の神乃至は十二山の神というのは産育神的性格の濃厚な山の神」であると説く。その論拠として、女である山の神は容姿が醜いため

表 林魁「美濃國に於ける山の「こ」祭」の事例

No	口頭伝承採集地域	山の神は女性	女性の「山のこ」祭への不参加	山の神と弁天様の確執	祀る人
1	郡上郡相生村中野				男児(山に入らない、木を切らない)
2	郡上郡相生村大字西乙原		○供え物の物品は作らない		男児
3	郡上郡和良村	○			男児
4	郡上郡東村				男児
5	郡上郡高田村大字半尾				男児
6	武儀郡美濃町大字安毛				男児
7	武儀郡下牧村大字長瀬				男児
8	武儀郡下牧村浅野	○(山の神婆々)			男児
9	武儀郡板取村大字岩本				(山神祭の日は山に行かない)
10	武儀郡洞戸村				
11	武儀郡富野村				男児
12	武儀郡坂の東村	○	○		男児
13	武儀郡神淵村				男児
14	武儀郡小金田村小屋名				男児
15	武儀郡中有知村生櫛	○山の神は気の荒い女性で菅原道真に大金を借りて返さなかったで、菅公に住家を燃やされた			男児
16	武儀郡洲原村下河和				男児(この日は山に行かない)
17	賀茂郡西白川村名倉				
18	賀茂郡西白川村渡合	○杓子に山神と記す、男根を描く	山神の供物は男子が作る		男児
19	賀茂郡蘇原村切井小字小丸山				
20	賀茂郡蘇原村大字切井小字塔の洞	○木製のおこぜを立てる		○	
21	賀茂郡佐見村上佐見字小野				
22	賀茂郡富田村瀧田		女児が来ると汚れると称して男児が追い出すこともある		五歳以上の男児
23	賀茂郡蜂屋村諸田		×男女共に供えものを作る		男子
24	賀茂郡三和村				男子

50	養老郡時村大字下山	？婦人同様家がない				男子
49	海津郡石津村大字太田	×大山積の神				若い衆と称する青年と子どもたち
48	不破郡青墓村	○	未婚の娘の家が山神祭の宿を引き受ける、くじは青年が代わりに引く			
47	不破郡宮代村	○				男児
46	本巣郡根尾村高尾	○				男児
45	揖斐郡横蔵村	○				
44	揖斐郡小瀬村中村		○			
43	揖斐郡長瀬村		○			
42	山県郡山県村三輪					男児
41	山県郡春近村世安	○（恵比寿様の奥様）		○		男児、親方
40	稲葉郡蘇原村伊吹					男児、女子以外の大人
39	稲葉郡各務村字山の前	○				男子、小児
38	恵那郡加子母村	○（女子は嫌い）		○		大人の男子
37	恵那郡笠置村加須里	○		○		男子（山神祭の日には山に入らない）
36	恵那郡上村	○		○		男子（山神祭の日には山に入らない）
35	恵那郡串原村釜井	○		○		男子（山神祭の日には山に入らない）
34	土岐郡日吉村本郷		馳走は女子も作ることがあるが、参詣は行かない			男子と小児
33	土岐郡稲津村	○（男神に捨てられた）				
32	土岐郡曾木村中洞		大人の女は絶対に行かない、また妊婦者のある家は行かない			
31	可児郡上郷村大字井尻	○		○		男子
30	可児郡土田村字上町	○		○		男児
29	可児郡帷子村中切			○		青年
28	賀茂郡富岡村肥田瀬					男子
27	賀茂郡坂祝村酒倉字雲埋					男子
26	賀茂郡太田町東中	○（人妻を山の神と俗にいう）	2月初寅は女の山の講（形式的）、11月の山の講の食べ物は女兒に与えない			11月の山の講は男子
25	賀茂郡太田町字下町					7、8歳から14歳くらいまでの男子

に、同性である女性に対する嫉妬が激しく、山の木一本も惜しむケチであるという言い伝えも挙げている。山の神の祭礼に女性に関わらない理由には、山の神が醜く、嫉妬深い女神であるという性質が関わっているようである。

二〇一九年四月に筆者は、秋山郷に隣接する長野県栄村(極にて)野(の)という山深い地区を調査で訪ねた。栄村は十二社信仰との関わりが深い地域で、村全体の氏神は北野天満宮であるが、「信州さかえのお宮とお寺」によると栄村の集落ごとの氏神は二十八社のうち十社が「十二社」であり、極野の氏神も十二社であった。極野では二月十二日に十二講、また八月二十四、五日に神楽を行って十二社を祀る。八月の神楽では獅子頭と天狗の面が用いられ、演じ手は男性である。『栄村東部谷の民俗』⁽³⁰⁾では、「十二大明神とは「十二の神様だ、もとは山の神だ」と言う。山の神様は女のこわい神様であると言われ、山に入る時には手を合わせて御祈りをする」と記されている。また、以前の十二講では水で米の粉を練ったカラコという団子を提供していたが、作るのは男性で女性には作らず、持ってもいかず、お参りも男性だけが行っていた。現在は女性もカラコを作って参詣もするという。

柳田が十二社信仰で着目した「おかる」の伝説は白馬村切久保諏訪神社の「七道祭」と関わるものである。この祭礼では神社の氏子が七枚の面神を被って行道を行う。二〇一九年九月に行われた七道祭では、面を被る方々から女性に面を付けないとうかがった。面を被る氏子は世襲性のため、子どもに男がいなければ娘婿がその役割を担うこともあるという。切久保諏訪神社の祭神は建御名方命であるが、切久保諏訪神社、および旧北城村には「たろっ子の婆様」「太郎子様」という民俗神の女神の伝承があり、その背景にやはり女神の存在がみえてくる。『小谷口碑集』の「太郎子様」という伝説では「太郎子様」は里人に機を教えて、神社の宝物の糸車は「太郎子様」が使われたものと伝えられる。また、『北安曇郡郷土誌稿』には、山中に住む姥神が女性の入山を嫌う、女性の赤不浄を忌むという伝説が散見される。中でも「姥池」という伝説では、若い女が禁じられた山にのぼり、月経で汚れた腰巻を洗濯したのを山姥が怒って池の水を血に変えて去ってしまったという。⁽³¹⁾

山の女神が嫉妬深く、醜いというのは後に付会された話かもしれないが、山の神の性別と豊穰という観点から考えると神の男性性、女性性という問題は重要である。そして女性が祭礼に参加しない、面を付けない理由には、『北安曇郡郷土誌稿』の「山

姥」の話にみられるように赤不浄というケガレの問題も関わっているだろう。

一方で、芸能の観点からは、女性が面を付けない理由として異なる意見もみられる。ふじたあさは『日本の仮面』「女は仮面がいなかった」⁽³²⁾において、男性が女性を表現する仮面は多いが、「日本の芸能には女がかぶる仮面はない」と述べている。その理由は、演じ手が男性に限定されたからではなく、仮面の機能の問題にあるとする。仮面は何かに扮するためのものであり、扮するのは神かこの世ならぬものが多いため、仮面をして人の目に見えないものの魂に形を与えるのだという。仮面をつけて舞うことで、魂が演者に依りつく。それは憑依状態であり、歴史的に憑依状態に入りやすい人は巫女、つまり女性であった。そのような女性の性質という観点から女性は面をかぶる必要がなかったと示唆している。

祭祀における女性と面という問題に関しては、もっと多くの事例が必要であり、神事芸能における一般的な事例が、「肉付き面」モチーフの文芸作品を論じるにあたって有効かという問題が残る。しかし、祭礼や芸能における面は、人々が実際に目にしてきたものであり、そのような面の事情を視野にいれて作品の背景を考慮しなければ、「肉付き面」モチーフの作品への

理解は一面的なものとなるだろう。そこで、一章(2)「女性と祭礼および面」で取り上げてきた女性と面にまつわる信仰にからむ事例を踏まえ、その延長上にある話における「肉付き面」モチーフを話題にして、その生成について考察していきたい。

二 山の神のイメージと「肉付き面」モチーフ

柳田國男は「後狩詞記」⁽³³⁾で「山神祭文狐直しの法」について取り上げているが、それを簡略化すると次のようになる。

山神の母一神が千二百もの産をした後、三日の間何も食べていなかった。その時、大摩の獵師が狩をするのに出会って割子を少し分けてくれるように頼んだ。しかし産の不浄を理由に断られる。次に会おう小摩の獵師は、人間ですら産をしてすぐに食事をとるというのに三日間も食事をしないと聞いて、不憫に思い割子を奉る。そこで、神が小摩には獲物を与えるという。

ここでは、山の神が母に喻えられて、産の穢れを気にせず山神の母を助けた獵師には獲物が恵まれる。山の女神は獲物を与える立場にあり、狩獵における信仰が明確に表されている。

『日光狩詞記』⁽³⁴⁾は、二荒山神社の宮司が日光山の獵師に伝わ

る伝承を聞き書きしたものである。女性の穢れを連想するから梅干しを持参してはならない、妻が妊娠中の者は、狐の仲間に加へない、狐師の妻や家族に出産があった場合は狐を忌むというものもみられる。このような伝承は穢れを忌み、狩狐の成功を願う狐師の信仰と関わっているが、山の女神の出産の話が信仰につながるとは必ずしもいえないようである。堀田は「山の神のメスとオス」の中で、山の神の出産に伴う次のような話を紹介する。

上越信の三州は十二神の地帯だが、ここでも十二人の子を持つという伝承が広い。東北の神楽の江刺家手というのに、山の神はもと男女二柱であったが、女の方が一度に十二人の子を産んだので、男神は恐れて逃げてしまった。この逃げた方の男の山の神はテンマ様というので爾来山の神の女は後家暮しとなり、狩人の助力を借って産をすまされたという。それで狩人なら一日、鹿なら七頭、鳥なら百羽、海の魚なら網の目だけ獲らして下さるようになったという。

この話では、「後狩詞記」と同じく山の女神が子を産むが、十二人の子を産んだために男神に逃げられて、後家暮らしに

なったという部分加わっている。「後狩詞記」および『日光狩詞記』の伝承は、山の神に対する信仰を明確にしているが、子を多く生んだ女神が男神に逃げられて後家になるという内容は山の女神を崇める話とはいえず、信仰に伴う伝承とは言い難い。

堀田吉雄は「山の神の口承文芸」の中で山の神の小祠に藤の木が多く植えてある理由として「昔、山の神は醜い女で夫は声のよい男であったというが、色好みの弁天様に夫を寝取られてしまった。それでいかった山の神は藤の蔓を縄にして、弁天が来たらひつくくつてやろうと待ちかまえている」という話を挙げている。林魁一の前掲論文では、「賀茂郡蘇原村大字切井小字塔の洞」の言い伝えとして「山の神は女神にして弁天様と仲悪しく、喧嘩をなして山の神は山に避け、弁天様は池中に避けて住みたり」とある(表20)。山の神と弁天様の確執が口頭伝承で語られる事例は、表において五十の地域で七地域にのぼる。これらの口頭伝承は、神聖な女神の話というより、人間の女性の姿が女神に投影されているようである。三角関係において嫉妬する女性を「山の神」として表現する例は芸能の世界にも表れている。

先にも挙げたが、金田一は「山の神」の面は「真黒な大きな

醜いお面」であり、「郷里の田舎の老婆たちには、今でも、妻を山の神というと、アハハと笑ってすぐにこの二つの連絡をつける。それほど婆さんたちに、この語原が今でも明晰に把持されているのは、つまり、そういう山の神の旧日本の信仰がなおその意識に生きているから」と述べている。金田一は妻を「山の神」とよぶ古い例が狂言にみられるとして、「狂言記」巻五の『花子』⁽³⁸⁾を挙げる。主人公が十七日間座禪をしようとて妻を偽り、花子（遊女）のところへ行く。その際に、冠者を自分の身代わりにして座禪衾を被らせて座らせるが、もし「山の神」が来ても頭を振って話をするなどといった。しかし妻はそれを知って、冠者の被っていた座禪衾を被り、冠者の代わりに主人を待つ。そこに事情を知らない主人公が帰ってきて花子の形見の小袖を「山の神」に見せるなどのろけて、妻が怒りを露わにする。

文芸作品であるお伽草子『磯崎』⁽³⁹⁾は正妻が後妻を妬んで面を付けて脅すという話であるが、延広は『磯崎』の類話に「嫉妬から鬼女となる例」として『閑居友』巻下の三、お伽草子「かなわ」⁽⁴⁰⁾、仮名草子『七人比丘尼』⁽⁴¹⁾を挙げているように、「肉附き面」モチーフの話であるとともに妬婦譚でもある。『閑居友』「かなわ」では男性の不義理に翻弄されて、心に恨みを抱いた

女が鬼になり、社会に悪影響を及ぼす存在となって自身の供養を求める。『七人比丘尼』でも嫉妬する菊井殿御台の背中に鱗ができて髪の毛は束になり、額に角がはえて目が光り、口が裂けて、身体に苦しみが生じる。これらの作品では、女性の心痛が外見の変貌で表現される。

しかし『磯崎』では、両者の容姿の差が対照的に表現される。新しい若い妻である「鎌倉より下りたる者」の様子は「年十七八の女房の、翡翠の髪さし揺り乱し、額の絶え間より仄かに見ゆる眉墨厳しく、紅の小袖脱ぎかけて、油火ほのぼのと立てさせ、草子打ち見て居ながら、空薫きして匂ひ、顔ばせ世の常ならず」と描写されており、妙齡の設定で振る舞いも姫君のように趣がある。一方、正妻は「我が影を並ぶれば、年半ば老け過ぎたる女の、色黒く髪赤く子持ちが母の恥づかし」と記される。色の黒さや髪の色だけでなく、子持ちであることまで嘆く『磯崎』の正妻は、口頭伝承の山の神の姿と重なり、新妻と正妻の描写の対比は、美しい弁天様と醜い山の神を彷彿とさせる。『磯崎』のこのような表現は、女性の老若や美醜を強調している。

延広、南方が例話に挙げる浮世草子『女大名丹前能』六之巻三「老ばれ恋慕山姥」⁽⁴²⁾では、夫を亡くした老婆が、子や嫁に仏

道に生きることを強いられて、心に不満を抱いて暮らしている。ある時、旅の男性に一目ぼれして、色気で誘うために孫が遊ぶ「お山」の面を被ろうとして、間違えて鬼の面を被って外れなくなる。老婆は、善を勧める嫁や子をそしり、煩惱のために恥の姿をさらすことになると嘆き、箱根権現に祈る。周囲の者も光明真言を誦誦すると、老婆に付いた面は外されて「心の鬼の角も折れ」た老婆は煩惱から救済される。老婆であるのに若い女性に扮しようとして面をかぶる姿は、滑稽さを醸し出す描写となっている。

「肉付き面」モチーフの話において異性に言い寄る、あるいは異性をめぐって同性と争うのはなぜ女性なのか。先に挙げた山の神に関わる口承文芸の中でも、子をたくさん産むがゆえに男神に逃げられる、美しい弁天様と男神をめぐって三角関係になるのも、女性の神格をもつ神である。

狩猟者にとって山は、恵みを与える場所であると同時に、変わりやすい天候によって危険にさらされる場所でもある。そこから、山の神に厳しく激しい神格が付与されて、そのイメージが長く連れ添った恐ろしい妻というイメージに重なり、「山の神」という隠語がうみだされたのであろうか。柳田が十二神楽との関わりで言及する黄表紙「浮世操九面十面」の中でも、各

番で口やかましい妻が「山の神」と表現され、先に挙げた金田一の「山の神考」では、この言葉を聞くと年配の女性が笑うという例からも、この言葉が一般に浸透していたことがうかがえる。

また、山の神が産育神としての性格を持っており、女性であるという言い伝えが多いことから、子をたくさん産むという点も理解できる。しかし、子を多く持つゆえに男神に逃げられる。美しい弁天様と男神をめぐって三角関係になるなどの話は、山の神の信仰における伝承とは言えず、人間世界における男女の有り様を反映するかのようである。

『磯崎』の正妻も、「山の神」のイメージを彷彿とさせる。『磯崎』は、『閑居友』巻下の三、「かなわ」、「七人比丘尼」などの「心の鬼」から姿が変化して、人が鬼になる話の系譜にある。『閑居友』巻下の三、「かなわ」では女性の情念がテーマであり、作品全体の基調は陰鬱である。『七人比丘尼』の女性たちの独白も沈痛である。しかし、それに比べると『磯崎』は、同じく「心の鬼」というテーマを描いているが、説教部分が長く、喩え話として用いられる話でも、とりわけ狂歌は諧謔的であり、女性の苦悩には冷淡である。さらに若く美しい女性と老年にさしかかり容姿の衰えた女性を比べる描写もみられ、正妻の嫉妬

が分不相応という印象すら与える。また、作品中に「血盆経」⁽⁴⁴⁾が引用されるなど、女性の嫉妬深さや罪業を天性のものとする見方もうかがえる。

山の神の祭や祭礼に多くみられる女性の禁忌、面を被る芸能が少ないという点には、女性の身体的な不浄の問題が関わっているが、そこには、女性の心身には不浄な一面があるという共通認識が垣間みられる。

神楽や芸能において女性が面をかぶることが珍しいという意識は、次のような表現にもみることができる。『磯崎』では、正妻から道具を貸してほしいと頼まれた猿楽が「女房の借物には似合はぬ物かな」と思案する場面がある。これと共通する場面が「天正狂言本」の「竹松」⁽⁴⁵⁾にもある。この曲では大名から能の道具を借りに行くように命じられた竹松という女性が、借りた衣装をぬす人に盗まれるが、隙をみて取り返す。解説では「本来この狂言は神事の能の道具の呪力により女でも盗人に勝つことができる」という意味がこめられているとある。能や猿楽の道具は、本来女性と縁の薄いものであるために、女性と共に描かれることで、その呪力が際立つという側面があるだろう。『磯崎』の「肉附き面」モチーフにも、面で人を脅かす「心の鬼」はもとより、女性が面を用いることは不自然であるという

心意が反映されているのかもしれない。

三 お伽草子『伊吹山酒典童子』にみる面の神秘

先行研究の紹介で、『磯崎』と共に「肉附き面」モチーフの話として赤本文庫旧蔵『伊吹山酒典童子』⁽⁴⁶⁾が話題に上げられていることを述べた。この物語では、酒呑童子が鬼になる契機として、「肉附き面」モチーフが取り入れられている。『磯崎』をはじめとする女性を主人公にした文芸作品では、罪業の結果として顔に面が付き、仏教による救済を経て面が外されるが、『伊吹山酒典童子』では面が鬼の顔から離れずに鬼になる。「肉附き面」モチーフの伝説では、男女いずれの主人公ともに面が外れず鬼や異形の者となるものがあり、その中には、「酒呑童子」伝説の一部も含まれる。山形県白鷹町に伝わる「酒呑童子」⁽⁴⁷⁾と長野県下水内郡栄村に伝わる「酒呑童子」⁽⁴⁸⁾の二例では、美男子が女性を避けるために面を付けて外れなくなり「酒呑童子」になる。この「肉附き面」モチーフの二例をはじめ、関東以北を中心に展開する「酒呑童子」伝説には、酒呑童子が鬼になる経緯を語る特徴があり、話の内容が恋愛と関わっている。ほかに、女性からもらった多くの恋文に執心がこもり、恋文から立

ち上がる煙や炎が稚児の顔にかかって鬼になる、あるいは女性に人気のある者が同性である男の妬みをかい、顔に鬼の絵を描かれて鬼になる話もみられる。この系統の「酒吞童子」伝説では恋愛を介して、人が「心の鬼」から視覚的な鬼へと変化する様子が表現されており、男女の恋愛を主題とする「肉附き面」モチーフの文芸作品に通じるものがある。

ところで、男女の恋愛と関わる「酒吞童子」伝説では、鬼になる者のほとんどが稚児である。徳江元正は前掲論文で、『磯崎』『伊吹山酒典童子』に稚児が出てくることを「仏教説話」の影響に基づくものとしている。恋愛と関わる「酒吞童子」伝説では稚児が女性の恋愛感情を無視、あるいは拒絶することから鬼になる。この傾向には、僧侶が女性によって身を滅ぼす「道成寺説話」の影響も考えられ、「酒吞童子」伝説以外の「肉附き面」モチーフの伝説にも同じ傾向がある。南方熊楠が挙げる信州白馬山麓の「四ツ谷の明神の三つの仮面」の話では、懸想して追いかけてくる娘を忌避するために侍が社にあった鬼女の面を付けると、外れなくなつて鬼となる。そして、追つてきた娘を殺した血が大桜草を染めたと伝えており、桜草の由来譚になっている。二章「山の神のイメーじと「肉附き面」モチーフ」で述べたが、山の神の話においても、「肉附き面」モチーフの文芸

においても、女性が恋慕して男性を追いかけて、男性が逃げるというパターンがみられる。

このように、「肉附き面」モチーフの話では、恋愛における「心の鬼」という問題が取り上げられるが、一方、『伊吹山酒典童子』の「肉附き面」モチーフには恋愛との関わりがみられず、「心の鬼」という問題が話の展開にはない。この話における「肉附き面」モチーフをどのように捉えるべきであろうか。

徳江は、『伊吹山酒典童子』における帝の新内裏造営を祝う風流の鬼踊りと面について次のように述べている。

やすらい祭りに見るがごとく、赤頭（シヤグマ）を被くものは多くは羯鼓をぶち、少年の役なのである。羯鼓の古名を、シッテンとも言った。私は、シユテン童子とは、羯鼓ぶちの児のことだと考えているが、それはさておき、二ツの御伽草子が教えてくれることは、能面であれ風流の面（狂言「清水」でも使われる）であれ、鬼の面を著けたら、もうひとではなく鬼になつてしまふという面が持つ神聖なる呪性の一面である。⁽³¹⁾

この指摘にあるように、『伊吹山酒典童子』には風流の芸能

の描写がある。帝の新内裏の造営を祝うため、南都、天台にも風流の興行の宣旨があり、天台の三千人の衆徒たちはどのような風流を興行すべきかを話し合う。そこで東大寺は「唐人のおどり」、興福寺は「田植え早乙女」のおどりをを行うことになり、天台では酒典童子が「鬼おどり」を提案して、三千もの鬼の面を一人で打ちあげる。

伊吹山から遠く離れるが、新潟県燕市の国上寺にも「酒呑童子」伝説が伝わっている。この伝説の中で、「酒呑童子」になる外道丸は新潟県の弥彦神社で大大神楽を演じる稚児であるが、国上寺の山伏や稚児が近世中期まで弥彦神社の八講を担っていたことは史実である。この神楽では、大人はすべて面を付けるが、稚児舞を演じる子どもたちは化粧をするだけで面は付けない。また同社には「天犬舞」という舞楽が伝わっており、「天犬舞は頭に天犬面、赤熊毛を垂らし、紅梅の水干、大口をつけ、首を天地左右にふりながら舞」うというもので、面を顔に付けずに額に戴くようにする。

先述した、ふじたあさや「女は仮面がいらなかった」では、日本には女性がかぶる面がないという指摘のほかに、子どもと面に関しても「能で子方が出る場合には、どんな役であつても直面である」と述べて、次のような考察を提示している。

子どももまた、憑依状態に入りやすいことが知られている。子どもの場合も、巫女と同じことがいえるかもしれないし、成人に比べて憑依の障害がはるかに少ないともいえるだろう。「七つまでは神のうち」というのは、このことを指すのだらう。邪気のない、いたいけな子どもが、突然昏睡状態になり、あらぬことを口走ったりすれば、まわりの大人たちが、そこに神意を見たとしても、不思議ではない。そして子どももまた、先に見たように、仮面を持たないのである。⁽³⁾

仮面を被らなくても憑依状態になれる子どもは、仮面を付けると仮面で扮するものに変化する危険性をはらんでいるのだろうか。面には、人の世界における是非の判断では計り知ることができない呪力があるという観念が見受けられる。『磯崎』の「肉付き面」モチーフは説教色が濃厚であるが、『伊吹山酒典童子』における面の呪力は怪異的ともいえる一面を見せている。

『伊吹山酒典童子』の話では、「肉付き面」モチーフの話の多くがもつ「心の鬼」のテーマを描いていないため、面が離れず鬼になる「酒典童子」の憐れさが際立つ。人を鬼にするのは悪心に限らず、時には不運や不条理であるというテーマがこの物

語の根底に横たわっているようである。

おわりに

本稿の「はじめに」で、「肉附き面」モチーフは「心の鬼」を可視化する表現であると述べた。しかし、女性の心の鬼を表現するのに「肉附き面」モチーフが多用されるようになると、その意味合いは「心の鬼」を戒める方向から、女性の老醜や心身の罪業を強調する方向へと変容していく。

柳田國男は『小谷口碑集』において、面が外れなくなった女性、おかるが岩窟に隠れてのちに、その穴が十二小祠として祀られるという伝説と、十二神楽で女性が杓子をもち、「山の神」と呼ばれることを結びつけて、「肉附き面」モチーフと十二山の神との関係に神聖さを見出そうとした。しかし、妻を「山の神」とよぶ言い方には、一般的には嫉妬深くて醜いという山の神への世俗的な意味合いがこめられており、否定的に使われている。

民俗事例や口頭伝承にみられる十二山の神の嫉妬深く激しい性質は、崇り神にも比肩するほどである。弥彦神社の妃神の妻戸大神にちなむ民間伝承では、弥彦大神の妃は十二人の子を産

んで、弥彦大神に逃げられ、その怨念が蛇になったという。⁵⁴⁾『小谷口碑集』には、蛇を殺して代々口が変形する崇りにあつた者が、蛇の霊を十二として祀り、難を逃れたという伝承がある。⁵⁵⁾十二山の神が、このような激しい神格を持つ女神であるため、女性性は祭祀に関わらないという事例が多くみられる。

その理由として、宗教学的な観点からは神事における女性性の問題、男性性の問題が考慮され、ケガレという視点からは女性の不浄という問題が存在したであろう。こういった事情から、女性には面と縁遠い一面があったと考えられる。

そのような面に対する観念が一般的なものであったとすれば、「肉附き面」モチーフの話は、悪心を抱くことは罪であるという倫理的な考えに加えて、女性が面を付けたら、猿楽や能の道具を女性が借りることへの違和感をもって受容されてきたのではないだろうか。

「肉附き面」モチーフは、「心の鬼」のテーマと深くかわっている。しかし、「肉附き面」モチーフの「心の鬼」を抱える者には女性が多いこと、そして『伊吹山酒典童子』の児が面をかぶり鬼おどりを演じたことで面が離れず鬼となる原因を、悪心のみで説明することは難しい。そこで、この問題を祭祀や芸能における「面」の扱いという観点から捉えることを試みた。

ところで、先行研究において延広は、欧米や中国では「狡猾な牧師」という話型があることを指摘しており、それと、日本の「肉付き面」モチーフの話と比較すると、日本の「肉付き面」モチーフの話の特異性が浮かび上がってくる。そのことから、日本の祭礼や芸能における面の概念が明確になるのではないだろうか、今後の課題としたい。

注

- (1) 美濃部重克「室町物語の挿絵小考」(『南山国文論集』第3集 一九七八・十二 南山大学国語学国文学会編)
- (2) 沢井耐三「お伽草子『磯崎』考」お伽草子と説教の世界」(『古典の変容と新生』一九八四 明治書院)
- (3) 徳江元正「面の神秘 見学生の母と大野木殿の子」(解説図録『能面大野出目家とその周辺』一九八九 六月十日〜七月十六日 大野市歴史民俗資料館)
- (4) 藤井貞和「いそぎ」(『國文學 解釈と鑑賞』46巻・11号 一九八一)
- (5) 南方熊楠「磯崎」に就て」(南方熊楠著・中瀬喜陽編『門弟への手紙 上松翁へ』一九九〇 日本エディタースクール出版部)
- (6) 柳田國男「妹の力」(『定本 柳田國男集』第九巻 一九七六 筑摩書房)
- (7) 延広真治「江戸文学の多様性——肉付きの面を通して見る——」(『帝京大学文学部紀要』日本文化学(41) 二〇一〇・三)

- (8) 関敬吾『日本昔話大成』第八巻「肉付き面」(一九七九 角川書店)
- (9) 高田衛編『江戸怪談集』下「丹波の国さいき村に、生きながら鬼になりし人の事」(一九八九 岩波書店)
- (10) 小池直太郎編『小谷口碑集』「尾花踊と七当の面と」(一九三二 郷土研究社)
- (11) 拙稿「長野県白馬村切久保諏訪神社の「七道の面」の伝説——種類の伝説集を比較して——」(『昔話伝説研究』三九号 二〇二〇・三 昔話伝説研究会)
- (12) 小池直太郎編『小谷口碑集』「太郎子様」(一九三二 郷土研究社)
- (13) 柳田國男『定本 柳田國男集』第四巻「おたま杓子」(一九六八 筑摩書房)
- (14) 全校作・豊国画「浮世操九面十面」(『統帝国文庫 校訂 黄表紙百種』一九〇一 博文館)
- (15) 注(6) 前掲書による。
- (16) 拙稿「肉付き面」モチーフの変容」(『日本文学論究』第七十九冊 二〇二〇・三 國學院大學國文学會)
- (17) 金田一京助「山の神考」(金田一京助選集Ⅲ『国語学論考』一九六二 三省堂)
- (18) 堀田吉雄「山の神の禁忌」(『山の神信仰の研究』一九六六 伊勢民俗学会)
- (19) 堀田吉雄「山神祭の芸能」(『山の神信仰の研究』一九六六 伊勢民俗学会)
- (20) 菅江真澄「追柯呂能通度」(『菅江真澄全集』第三巻 一九七二 未来社) 二五五頁参照、菅江真澄が寛政十年一月、東津軽郡平打町の童子部落に赴いた時の記録である。
- (21) 堀田氏、注(19) 論文参照。
- (22) 堀田吉雄「産育神としての山の神」(『山の神信仰の研究』一九六六

- 伊勢民俗学会)
- (23) 菊池章太「十二山ノ神の信仰と祖霊観(上)」(『福祉社会開発研究』1 二〇〇八・三 東洋大学学術情報リポジトリ)
- (24) 倉田一郎「氏神参りの埒村五三 山の神」(柳田國男編『山村生活の研究』一九九八 民間伝承の会) 四一四頁。
- (25) 小井川潤次郎「いたこの伝承」(谷川健一『巫女の世界』日本民俗文化資料集成6 一九八九 三一書房)
- (26) 堀田氏、注(22) 論文参照。
- (27) 菊池氏、注(23) 論文から引用。
- (28) 林魁一「美濃國に於ける山の「こ」祭」(折口信夫編『日本民俗学のために』6 一九四七 民間伝承の会)
- (29) 「信越さかえのお宮とお寺」(一九九五 栄村教育委員会)
- (30) 埼玉大学文化人類学研究会『栄村東部谷の民俗―長野県下水内郡栄村―志久見・長瀬・北野・極野』(一九九二)
- (31) 『北安曇郡郷土誌稿』第二輯二冊「姥池」(一九三〇 郷土研究社)、他にも「鷹狩山の別れた話」「葛温泉の話」「大姥山」に赤不浄及び、女性の登山を忌む話がみられる。
- (32) ふじたあさや「女は仮面がいらなかった」(『日本の仮面 神々の宴』一九八二 東海大学出版部)
- (33) 柳田國男『定本 柳田國男集』第二十七卷「後狩詞記」(一九七〇 筑摩書房)
- (34) 「日光狩詞記」(日光・二荒山神社資料4 一九六五 二荒山神社文化部編)
- (35) 堀田吉雄「山の神のメスとラス」(『山の神信仰の研究』一九六六 伊勢民俗学会) から引用。
- (36) 堀田吉雄「山の神の口承文芸」(『山の神信仰の研究』一九六六 伊勢民俗学会)
- (37) 金田一氏、注(17) 論文参照。
- (38) 幸田露伴 校「狂言記」上 巻の五「花子」(一九〇三 博文館 国立国会図書館デジタルコレクション)、近世期に出版された狂言の台本集 万治三年(一六六〇)、寛文五年(一六六五) 元禄十二年(一九九九) 版がある。
- (39) 「磯崎」(新編日本古典文学全集63『室町物語草子集』二〇〇二、寛文七年(一六六七) 刊。
- (40) 慶政著「閑居友」巻下の三「うらみふかき女いきながら鬼となる事」(美濃部重克校注『中世の文学』一九七四 三弥井書店)、承久四年(一二二二)に成立。
- (41) 「かなわ」(『室町時代物語大成』3 一九七五 角川書店)
- (42) 『七人比丘尼』(『仮名草子集成』36「七人ひくにん」二〇〇四 東京堂出版、寛永十二年(一六三五) 刊、嫉妬によって姿が変わるのは「我、本国は、阿波の国の者」と述べる「菊井殿御台」。
- (43) 『女大名丹前能』六之卷三「老ばれ恋慕山姥」(『西沢一風全集』2 二〇〇三 汲古書院、元禄十五年(一七〇二) 刊。
- (44) 血盆経では、産の血や月水の穢れのために女性は血の池地獄へ堕ちると説かれる。(資料は、高達奈緒美編『仏説大蔵正経血盆経和解』上巻 東洋大学附属図書館哲学堂文庫蔵 二〇一四)
- (45) 金井清光『天正狂言本 全釈』「66竹松」(一九八九 風間書店、巻末に天正六年(一五七八)の日付があると記される。なお「竹松」については佐竹昭広「下廻上の文学」「転落の序章」(一九六七 筑摩書房)で紹介されている。
- (46) 注(45) 前掲書、五二六頁の「解説」による。
- (47) 「伊吹山(大江山以前) 酒典童子」(『室町時代物語大成』2 一九七四 角川書店、赤木文庫旧蔵 小絵巻八軸。
- (48) 武田正編『牛方と山姥 海老名ちやう昔話集』「酒呑童子」(一九七〇

- 発行者 海老名正二)
- (49) 浅川欣一編『信濃の昔話』第四集「酒吞童子」(一九八一 スタジオ ゆにーく)
- (50) 南方氏、注(5) 論文参照。
- (51) 徳江氏、注(3) 論文参照。
- (52) 弥彦神社社務所「弥彦神社の舞楽」
- (53) ふじた氏、注(32) 論文参照。
- (54) 藤田治雄「弥彦の片目神(3)」(『高志路』二〇四号 一九六六 新 潟民俗学会)
- (55) 小池直太郎編『小谷口碑集』「十二の杉」(一九二二 郷土研究社)